内閣総理大臣賞

繋がる社会、人、未来

北区立明桜中学校３年
松﨑　潤

税が話題となる時、なぜ負担という面が強調されるのだろう。誰もが税の恩恵を受けているはずなのにと不思議に思っていた。僕が税を意識するのは消費税を払う時くらいだが、それでも通学路の整備や学校整備、教材や実験道具、部活の試合を行った体育館、幼い頃から通い続ける図書館など、身の回りには享受している物が多い事を実感している。これらは納税の仕組みが整っているからこそ活用できるが、人は税による恩恵をあまりにも当然のように受け入れ、その目的や役割よりも負担感に視点を向けるのではないか。

では、納税しなければ負担が減り楽なのだろうか、と興味を持ち調べてみると、そうではない実例を見つけた。一九八十年代、南半球の人口一万人程の小国は、リン鉱石で財をなし、無税のまま医療も教育も公共サービスも提供した。結果は資源の枯渇と共に約三十年で国の経済は崩壊、近隣先進国の援助に依存し現在も苦心している。僕は財政破綻は当然だが、人々から勤労意欲と納税意識、税に対する関心が消滅した事が怖いと思った。国や地域を衰退させた元凶だと感じたからだ。

税は財源があるからとやみくもに配分したり、後先考えず一時を謳歌する為に使うものではない。納税している人だけがサービスを受けるものでもない。それでも税を納めるのは将来社会を支える子供達の為、今後の社会をより良くし、誰もが安心して暮らせるようにと願うからだ。税は「社会と人を繋ぐ」「現在と未来を繋ぐ」大切な役割を担っている。子供の僕達も、少しでも教材や施設を大事に使う、ゴミの量を減らす、省エネを心掛け、自身の健康を保つなど貴重な税を大切に使う事に協力はできる。そして何よりも税は大人が考える事だと決めつけず、関心を持ち続けることが必要だと思う。

今後、少子高齢化が更に進み、税を納める人は減るのに福祉や医療に使う税金は増えるだろう。今、身近にある課題は将来の自分に関わると自覚を持ちつつ、税の目的や使い方を学びたい。僕が小学生で大怪我をした時もその後の通院も、また税について情報収集しに行った図書館も、誰かの尊い税が使われている。それならば、いずれ僕が働き手となった時、納税の意義や目的をきちんと理解していたい。そうする事できっと納税を「負担」ではなく「誇り」と思えるだろう。

僕達の暮らし一日にどれだけの税が活かされているのか今一度考えたい。社会基盤を支える税を無駄にしていないか。災害や疫病への備えは十分か。地域の課題は何か。情報やサービスを受け取れない人はいないか。税について大人も子供もオープンに意見を交わす事で学びを深め、発信力を高めれば「社会と人、現在と未来を繋ぐ税」というものをより身近に感じ、正しい在り方を見つける力になると思う。